

遺跡を掘る!



第3号 2019年3月13日

(公財)鳥取県教育文化財団調査室では、平成28・30年度に一般国道313号の改良工事に伴い山ノ下遺跡の発掘調査を行いました。遺跡からは、平安時代後期から鎌倉時代に至る集落跡が確認され、数多くの貴重な遺構と遺物が出土しました。現在、発掘調査報告書の刊行に向け整理作業を進めています。本号では主に重要な発見とされる大型建物について簡単にご紹介します。

山ノ下遺跡 (やまのしたいせき)

遺跡は倉吉市^{かみふるかわ}上古川・^{おがも}小鴨地区に所在し、小鴨川左岸の河岸段丘上に立地します。北西約100mには、この地域の有力者であったとされる小鴨氏と関連がある「市場城」^{いちばじょう}があります(写真①)。

発掘調査では、縄文時代から室町時代にかけての遺構や遺物が見つかりました。主な時代は平安時代後期から鎌倉時代(約1000年～800年前)で、掘立柱建物21棟、区画溝、小穴などの遺構が検出されました。なかでも床面積150㎡以上の2棟の大型建物は、平安時代後期の建物としては県内で最大規模となります。

また、この時代の有力者が持っていたとされる中国から輸入された青磁や白磁といった陶磁器(貿易陶磁)^{ほうえきとうじ}も数多く出土しました(※1)。

このことから、山ノ下遺跡はこの地域を治める有力者に関わる集落であると推定されます。

※1：第2号を参照





写真②



写真③

山ノ下遺跡では、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物が確認されました（写真②）。建物群は大きく2時期（掘立柱建物 13・19→掘立柱建物 12・20へ変遷）に分かれ、各時期の建物がL字形の配置となっていることがわかります。掘立柱建物 13 は8間 × 5間（19.7×12.2m）になる総柱建物で床面積は 240 m²、掘立柱建物 12 は9間 × 4間（20.6×8.3m）で床面積は 171 m²にもなります。いずれも、この時期では県内で最大級の規模を誇り、この地域を治める有力者の住まいであったと考えられます。

大型建物群の西側には、現存長 17m、幅 0.5～1 mの溝（S3010 溝）が検出されました。建物群と平行することから、建物を区画する溝であったと考えられます（写真③）。

区画溝のなかには、建物で饗宴に使用されたと考えられる大量の土師器皿などが廃棄されており、その多くは意図的に割られていました。



写真④



写真⑤

建物の柱穴の多くは、建物の使用後に柱を抜き取っていることがわかりました。抜き取った柱穴には土師器の皿や坏などを入れて埋め戻したものもあり、建物解体の際に地鎮などの祭祀が行われていた可能性があります（写真④・⑤）。